

中学校英語指導における 「文構造への気づき」を促す授業

— 「内容の深まり」に着目して —

学籍番号 169969

氏名 家倉 蘭

主指導教員 柏木 賀津子

1. 先行研究と目的

外国語（英語）を学習する際には第二言語習得理論（Second Language Acquisition: SLA）に基づく指導が望まれる。外国語学習者は大量の英語のインプット（聞く、読む等）に触れることを通して、言語形式と意味をつなげ、理解するといったインテイク（内在化）の過程を辿る。また、Schmidt（1993）は内容のある大量のインプットに触れる際に、意識的に学習者が言語の特徴に注意を払うことで学びが得られやすいことを「気づき仮説（noticing hypothesis）」とし、言語習得には言語形式に対する気づきが重要であることを指摘した。これら背景を踏まえ、Long（1988）はFocus on Form（以下、FonF）を提唱し、FonFは学習者の言語形式に対する気づきを促すことができる指導法であると言える。そこで本研究では、内容の深まりに着目したFonFを取り入れ、文構造の気づきを促す文法指導の効果を検証することを目的とした。

2. 基本学校実習 I・II

本実践では、内容のある英語を豊富に聞かせることを中心にしたFonFの授業実践を行った。“Which do you ~,XorY?”, “Which does he /she ~,XorY?”の単元で文構造の導入に「無人島に持っていくもの」と意味のある場面を設定した。教師の英語での語り（Teacher Talk）や自然なやりとりの中で教師が行う生徒の発話エラー修正（Recast）を用いて“Which do you ~,XorY?”と3人称単数-sへの気づきを促した。検証方法は、事前と事後にリスニングテストを行い生徒の英語を聞く力の変容を把握した。また、「嬉しい・楽しい」と感じる学習場面のアンケートを行い、英語授業における英語の学びの捉え方の変化を分析した。リスニングテストの分析結果より、音声形式と意味をつなぐ力は顕著に伸び、アンケートの記述からも、事後では「文法への興味」に関わる記述が増えた。Teacher TalkやRecastといった教師と生徒のやりとりによる豊富なインプットとそれから得られる気づきが重要であることや教師と生徒、生徒同士のやりとりの活動の有効性を確認した。また、実習校の英語教員に「文法指導の工夫や難しさ」について半構造化インタビューを行い、KJ法で整理した。コミュニケーションのある文法指導に重要性を感じているが、指導時間の問題で実践が難しい様子であることを把握した。

3. 発展課題実習 I

本実践では、教師と生徒や生徒同士のやりとりを中心としたFonFの授業実践を行った。不定詞の単元で意味のある場面を設定し、生徒が聞いていて楽しいTeacher Talkを行った。展開ではグループ活動を取り入れ、生徒同士のやりとりの場面を確保した。検証方法は、事前と事後にリスニングテストを行い、生徒の英語を聞く力の変容を把握した。また、インタビューテストを行

い、教師と生徒とのやりとりを通して即興で発話する力を把握した。リスニングテストの分析結果からも、音声形式と意味をつなぐ力は伸びた。インタビューテストの分析結果では、即興で発話する力（不定詞の出現回数）と英語を聞く力（リスニングテスト）に正の相関があった（ $N=27$, $r=.35$, $*p<.05$ ）。内容のある英語を豊富に聞くインプットや教師との英語でのやりとりは、アウトプットを支える土台であった。また、インタビューテストの談話分析の結果から、生徒の発話を促すには教師が発話を引き出すこと、また生徒たちはお互いのやりとりから文構造を学ぶことがあると分かった。

4. 発展課題実習 II

本実践では、思考が伴う内容のある言語活動（CLIL）と文構造への気づき、FonFの授業実践を行った。“Time for school”の小晰と『まんじゅうこわい』の英語落語（There is / are ~ 構文、Because S+Vと動名詞）の単元で英語落語を内容として扱った。実際に落語で使う扇子や手ぬぐいを用いて、教師が落語を披露し（Teacher Talk）、落語のオチを考える課題を設定した。生徒が落語のオチを考える際は、お助けBOXというカードを用意し、生徒がそこから語彙やフレーズを借り、アイデアを思いつくようなファシリテーションを行った。検証方法は、英語落語のオチを考える課題のワークシートをポートフォリオで蓄積し、ループリック評価（3段階）を行った。「落語のオチ」と「文法の正確性」は強い相関があった（ $N=56$, $r_s=.94$, $**p<.01$ ）。思考活動と文構造を密接に絡み合わせることで、生徒は落語のオチを工夫するために目標言語の表現の一部を入れ替え、表現するといった文構造の仕組みに気づき、落語を創造することができた。また、落語の内容理解や文構造の気づき等の自己効力感の変容を検証するために、全授業（3時間）の終わりにCan-Doリストの自己評価を行った。授業を踏むごとに落語への興味、内容理解、文構造の理解は上がる傾向があり、思考と文構造を絡み合わせる言語活動の有用性を確認できた。

5. 結論

以上の実践から結論は4点にまとめられる。1) SLAに基づく豊富なインプット、つまり Teacher Talk が必要不可欠である。Teacher Talk は「無人島」や「落語」で実践したように生徒がおおまかに理解でき、聞いていて楽しく、言語内容の質が高いものであることが重要である。2) 教師と生徒、生徒同士のやりとりの場面を授業内に取り入れることである。お互いの発話から学び合い、文構造への気づきが促される。3) 思考を伴う内容ある活動を取り入れることで、文構造への気づきを促せる。英語落語のオチを考える際に、思考活動と文構造を組み合わせることで、生徒たちは内容へ興味を示し、文構造への仕組みに気づいて表現する姿があった。4) イラスト提示、例文提示などで発話を引き出し、アイデアが浮かぶようなヒントを与える「はしご」を教師が仕掛けることである。生徒たちは、内容への興味から、英語を聞いたり、真似して話したり、表現するために書いたりと様々な言語活動を通して、自ら気づき、学ぶ姿勢が出てきた。「文構造への気づき」は学習の自立性を生み出し、生徒たちが自ら言語を学び続けようとする授業に繋がると考える。本実践が今後の意味ある文法指導へと繋がる授業づくりに少しでも役に立つことを願う。